

# SHOW HEY シネマルーム

★★★

## 母—小林多喜二の母の物語

2017年・日本映画  
配給/現代ぷろだくしょん・110分

2017 (平成29) 年4月23日鑑賞

テアトル梅田

### Data

監督：山田火砂子  
原作：三浦綾子『母』  
脚本：重森孝子・坂田俊子・山田火砂子  
出演：寺島しのぶ/塩谷瞬/趣里/  
山口馬木也/徳光和夫/赤塚真人/佐野史郎/渡辺いっけい/松本若菜/真行寺君枝/磯村みどり/浅利香津代/神田さち子/加藤純平/水石亜飛夢/月船さらら/草薙仁/上野神楽

### ■ショートコメント■

◆三浦綾子の原作『母』を、株式会社現代ぷろだくしょんが山田火砂子監督を起用して製作。その製作意図には「二度と戦争をさせない」とあり、山田監督は「戦争への危機を感じ、『時代を逆戻りさせない』決意のもとこの作品を作りました」と述べている。また、公式ホームページで見る本作の「制作意図」には、「この映画も戦争反対・平和映画です」と書かれている。

たしかにそれはそのとおりだし、それを主張することの価値を私も十分認めているが、そうかといって、この映画の出来は・・・？

◆いうまでもなく、小林多喜二は戦争前の日本で日本共産党の活動を続ける中で逮捕され、拷問の末1933年に29歳の若さで死亡したプロレタリア作家。とりわけ『蟹工船』が有名で、SUBU監督の『蟹工船』(09年)はそれを映画化したものだが、その出来はイマイチで私の採点は星三つ(『シネマルーム23』未掲載)だった。

本作で多喜二の母セキを演じたのは、『キャタピラー』(10年)(『シネマルーム25』215頁参照)でベルリン国際映画祭銀熊賞(女優賞)を受賞した寺島しのぶ。彼女は本作でも、冒頭から流暢な秋田弁を見事に操りながら、字は読めないものの夫と子供に尽くす優しい母親役を見事に演じている。しかし、いかんせん、それはいかにも教科書的かつ教条的で、セキが語るセリフはすべて正しい事、望ましい事ばかりだし、やっていることも、無知で貧乏だけれども神様のような行いばかりだ。

そんな母の下で育てられた多喜二も、優等生のセリフのオンパレードだ。もちろん、それが悪いというわけではないが、貧しい中でも人として正しい行動のみを立派に重ねている母子の姿、さらに夫の末松(渡辺いっけい)の生活ぶりを見ていると、まるで「神の御業」

を見るようで違和感がいっぱい。こんな生き方は、俺にはとてもとても……。

◆貧乏人は子たくさん、と決まっている。小林家もその通りで、セキは三男三女を育てた(もっとも長男が早死にしたため、次男の多喜二が長男役となつたらしい)が、貧乏な小林家から多喜二が小樽高商を卒業し、銀行に就職できたのは素晴らしいこと。三男の三吾(水石珥飛夢)もバイオリンの勉強をしているから、当時としては画期的なことだ。多喜二は生来真面目な性格だから、このまま当時としては高給取りだった銀行員として生涯真面目に勤めれば、両親を人力車に乗せて小樽見学をさせてやる夢の実現くらいはチョロいもの。

てなわけで、父末松亡き後、母セキを中心とする小林家の支柱として働く多喜二にみんなの期待が集まったが、社会の矛盾に目を向け、労働者の貧困に目を向け、迫りくる戦争の音に耳を傾ける多喜二は次第に共産党の思想に目覚めると共に、その活動の一環としてプロレタリア小説を書き始めたから、大問題が……。

◆今では、小林多喜二のプロレタリア作家としての活動や拷問の末に殺されてしまった状況は、日本共産党の文献を中心にたくさん発表されているので、私もよく知っている。したがって、本作のミソは、その多喜二の活動を描くのではなく、母セキの生涯に焦点を当てたところにある。しかし、それでも本作のストーリーが、多喜二の活動に沿って進むのは仕方ない。もっとも、多喜二が逮捕され獄中生活に入ってから、その情報がセキの元に届けられることは全くないので、せつかく多喜二の後を追って弟の三吾と共に東京生活をスタートさせたセキも、多喜二に会えたのはほんの数えるほど。そのため、本作のメインは、拷問の跡も生々しい多喜二の死体との「ご対面」になってしまう。

本作がそんなストーリーになるのはやむを得ないが、そこで登場するのが、三浦綾子の原作を映画化したこともあり、キリスト教の影響だ。多喜二の死を受け入れられず苦しむセキ。長女チマ(松本若菜)の誘いで教会を訪れたセキは、イエス・キリストの死の話聞き、何も悪い事をしていないのに殺されたイエスと多喜二の姿を重ね合わせ、思いを巡らす……。

◆私はプロレタリア作家、小林多喜二に大いに興味を持っているし、その母親に焦点を当てて多喜二の死を考えることにも大に関心がある。そして、本作はドキュメンタリー映画ではないから、その描き方は脚本家と監督の自由だ。そのため、それなりの期待を持って本作の鑑賞に臨んだが、そのあまりに教科書的かつ一面的、教条的な描き方に少し失望。これでは、映画としては何の面白みも感じられないのでは……？

2017(平成29)年4月26日記